

中世異類女房譚の一形成

——お伽草子「木幡狐」を中心に——

荒 川 結 香

一 はじめに

日本における異類婚姻譚の歴史は長い。異類婚姻譚とは人間の姿に化けた動植物が人間と夫婦になる話の総称で、神話から民話まで世界中に数多く存在する。日本でも時代ごとに様々な異類婚姻譚が生み出されてきた。中世においては室町時代頃のお伽草子の作品群に多くみられ、市古貞次氏によるお伽草子の六分類においても、「異類小説」は一つの独立したカテゴリーとして設定されている。この流⁽¹⁾行の背景には一体何があり、異類婚姻譚はどのように受容されたのだろうか。ここでは異類婚姻譚の中でも特に、比較的多くの時代に作品が存在した狐女房譚を扱い、中でも中世に成立したお伽草子の一篇「木幡狐」を軸として、中世異類婚の特徴、延いては作品が編まれた意図を考察する。

「木幡狐」とは室町後期頃の成立とされるお伽草子の一篇であり、多くのお伽草子と同様に作者は明らかでない。物語の概要は『お伽草子事典』の記事を引用させてもらう。

山城国木幡の里に棲む雌狐きしゅ御前が、十六歳の時、三位の中將に懸想をする。中將は女人に変化したきしゅ御前を見初

め、契りを結ぶ。そしてきしゅ御前を京五条の館に住まわせ、男子出産後、母子とともに中將の両親に迎えられる。三年経たある時、中將の乳母中務が若君に犬を献上する。これを恐れたきしゅ御前は世を憂いて嵯峨野に庵室を結ぶ。内裏での管絃の遊びから帰宅した中將は、きしゅ御前の不在を知って嘆く。きしゅ御前は若君の栄えを余所ながら見て悦ぶ。(以上、渋川版による)⁽²⁾

異類との交契、その後の別離などの要素をみると、典型的な異類女房譚であるが、作中には仏教的な描写が多い。まずこの物語を読み解く前に、「木幡狐」が成立した時代について、また、狐女房について整理しておきたい。

二 中世の物語形成

まず、「木幡狐」が成立した時代、中世の文芸の一般的な形成背景を確認しておく。市古貞次氏は中世文芸の創作事情について以下のように言及している。

文芸の享受者が激増し、その受容に応じきれない際は、いきおひ粗製乱造とならざるを得ない。(中略)種々雑多な、およ

そ文筆をよくする者が、手のふれるにまかせて、説話集でも、軍記でも、歴史物語でも、物語でも、謡曲でも、多少の粉飾を施し時には補綴を行って、読み物とした類が見受けられる。³⁾

即ち、中世は文芸享受者が急増したことで、様々なジャンルの作品が多数作られた時代であり、中世小説の作者たちには前代の物語から要素を取り入れるなど、新たな趣向によって物語の面白味を求める動きや発想があつたと考えられる。そのような中で、中世では「異類」を主人公とする話が一つの流行としてあつたように思われるのだが、市古貞次氏は異類物の主な形成要因について、①歌論の影響、②無心の歌、③仏教思想の影響、④怪異を信じ、怪異譚を好む中世人の心理、⑤民間説話への取材、の五つを指摘している。⁴⁾中でも特に注目されるのが、③の「仏教思想の影響」である。今回取り上げる「木幡狐」含むお伽草子では、仏教の視座から己の境遇を嘆き、仏に縋る人々の姿が多く描かれ、物語の展開とも深く関わってくる。

中世仏教は一般民衆から多くの信仰を集め、勢力伸張が進んだとされるが、中世末期には凋落の道を進んだこととなった。勢力拡大した仏教は本来の方から逸脱し始め、僧侶達は墮落、破戒し、民衆たちは宗教や神仏への疑いを抱き始める。それに加え、中世もやや下るに及んで起こった反垂迹思想や、仏教への強圧政策により仏教は崩壊することとなったのである。以上のことから、室町末期の成立とされる「木幡狐」は仏教の衰退期に成立したものと考えられ、単純に仏教を信奉する読者の要請に依って作られた作品とは言えないようである。

三 狐女房譚成立まで

さて、次に視点を変えて狐女房譚の成立にも目を向けてみたい。中国における狐説話については、富永一登氏の「狐説話の展開——六朝志怪から唐代小説へ——」に詳しく記されている。⁵⁾それによると「野生の狐の観察によるイメージ」に始まった妖狐像が狐説話成立の要因となつたらしい。そして狐説話は唐代において一つの流行となつたようで、現存最古の小説類書『太平広記』（九七七年から九七八年に成立）所収の狐説話八十三話のうち六十九話が唐代のものである。また、狐説話が怪異退治譚として宗教家たちに利用される一方で、宗教性を離れた説話も登場し始める。これが女の異類との愛情物語への素地となつたらしく、妖狐は人々の理想の女性像を体現し得る存在として愛され、異類女房譚として確立していく。

一方日本では、古く狐は瑞獣として『日本書紀』（七二〇年）の記事に登場し、『扶桑略記』（一〇九四年以降）などでは、「専女」と呼ばれる神とされている。また、原始信仰から生まれた稲荷神、またはその使者として信仰されたことも知られている。その一方で、悪狐の記事も既に平安時代の文献にあり、一一〇一頃成立の『続本朝文粹』中の「狐媚記」という記事には、人を化かす狐の話数篇が収められており、文化人の間にも中国の妖狐像が浸透していたのではないかと窺える。日本の狐は、原始宗教と早くから結びついていたことから、史籍等を見ることのない非知識層にとっては神やその眷属としての善狐のイメージが強く、知識層の間にも同様の狐信仰が浸透していたと考えられる。しかし、時代が下って中国由来の発展した妖狐像が民衆まで広く浸透したことで、知識層においては

瑞獣と妖獣という二面性が顕著になっていったのではないだろうか。

ここで日本の狐女房譚を概観してみたい。まず、民間伝承の「狐女房」(「信太妻」説話)がある。また平安初期成立の『日本霊異記』上巻第二「狐為妻令生子縁」は、「狐女房」と近い物語構成に加え始祖譚の性格も持つ。その後室町時代前期頃には『曾我物語』巻五「三原野の御狩の事」と『伊勢物語』の注釈書である『伊勢物語難儀注』所収の説話があり、これを本文文では便宜上《玉津島明神歌徳説話》と呼ぶ。これは、在原業平と女狐との交契説話であり、神徳を描く意図が読み取れる。さらに室町後期頃になると、「木幡狐」を含め、お伽草子に様々な狐が登場してくるのである。日本の狐女房譚には話型に類似点が多く、昔話「狐女房」と『日本霊異記』所収の「狐為妻令生子縁」を比較すると、狐と男の交契、後の別離、生まれた子供の特異性などという要素が一致する。その一方で『日本霊異記』の説話は、男女が伴侶求めにより出会うこと、別離の原因が犬であること、子供に宝物を授ける描写を欠くという点で昔話「狐女房」との相違があり、『日本霊異記』の時点において狐女房は一族の始祖となる神霊的な力を持ちつつも、その神性は些か薄まっているようである。同様に「木幡狐」にも他の狐女房譚との類似が見られ、大坪俊介氏は、

『木幡狐』に信仰的な面がみられることを除けばおおよその話の骨子は『日本霊異記』と共通していることが分かる。(中略)『木幡狐』は古い形の異類婚姻譚に子別れなどの新しい要素を取り込みつつ、視点の変更などによって物語としての要素をより強調して書かれた正統な異類婚姻譚の後継作であるといえるだろう。⁶⁾

と論じている。狐女房の祖型を昔話「狐女房」と考えると、狐女房譚の諸作品がこの流れを継いで物語を形成してきたと考えられる。一方で「妖狐」は中世説話集を中心に多数登場しているが、中国思想の流入によって次第に妖狐観が強固、優勢になっていったものと推察できる。このことと異類女房譚の物語構造の類似を考え合わせると、劣勢となった善狐譚に属する狐女房譚は、それぞれ近い継承、影響関係にあったのではないだろうか。

四 「木幡狐」読解

前章において、日本の異類女房譚の系譜の中で物語の構造が継承されていたと指摘したが、「木幡狐」では新たに「異類視点での語り」「仏教色の濃さ」「子孫の繁栄が物語の焦点ではない」という要素が加えられている。以上の要素は時代の風潮や趣向を反映したオリジナリティの表れと言えるだろう。ここに「木幡狐」成立の要因が見えるのではないだろうか。以下で確認したい。

まず、「木幡狐」は異類である「きしゅ御前」の視点から物語が描かれる。同時代の異類物語である「鼠の草子」や「玉水物語」も同様だが、これら三作品の異類が共通の思想を持っていることが興味深い。「木幡狐」のきしゅ御前曰く「われ人間と生れなば、かかる人にこそ逢ひ馴るべきに、いかなる戒行によりて、かやうの身とは生れけるぞや」、「鼠の草子」の鼠の権頭曰く「われ、先の世の因果もやありけむ、同じ畜生に生れながら、かかる小畜となること無念なり」、「玉水物語」の玉水の前曰く「身の有様を、くわんするに、我先のよに、いか成つみの、むくひにて、かゝるけたものと生れけん」と、同じように「畜生」の身を嘆いている。このような輪廻転

生観は、中世以前から意識されていたようで、『今昔物語集』は畜生が人間に転生する話を多く載せる。この時代、異類の立場はかなり零落してしまったようである。「木幡狐」にみられる輪廻転生観について山下裕子氏は、

こうした内容、考え方は読者にある不安を与えたものであろう。そして、きしゆ御前がその不幸を仏にもとめている事により、現世における仏教信心を暗示したものと考えられる。⁽⁷⁾

と論じており、読者へ与える効果が想定されている。しかし「木幡狐」が成立したとされる室町末期は仏教の凋落期にあった。そのような時代に仏教を称揚するような作品が作られたことは矛盾があるようにも感じられる。次に、その他の物語要素も読み解いていきたい。

「木幡狐」はその題に「木幡」という名がある通り、木幡と都を中心として物語が展開する。そもそも木幡とは紀伊伏見山の東面までを指し、伏見山が木幡の里と接することから伏見山の東面を木幡山という。木幡は陵墓が有名であり、『栄花物語』には配流直前の伊周が道隆の墓を参拝する場面があるが、「山近にてはおりさせたまひて、くれくれと分け入らせたまふ」と馬では通えない場所として書かれ、中世以降荒廃していたことがわかる。また、木幡のイメージは特に柿本人麻呂の詠んだ

山科の木幡の山を馬はあれど歩より吾れ来汝を思ひかね

〔万葉集〕 卷一一・寄物陳思・二四二五

と、これの『源氏物語』宇治十帖への引用によって確立したとされる。その通りに『拾遺集』以後は、

題しらす

人麿

山しろのこはたの里に馬はあれと

かちよりそくる君をおもへは

〔拾遺和歌集〕 卷一九・雑恋・二二四三

物名 かるかや 俊頼

我こまをしはしとからは山しろの

こはたの里にありとこたへよ

〔千載和歌集〕 卷一八・雑下・一一七三

かち人の道をそおもふ山しなの 後京極撰政

こはたのさとの秋のゆふきり

〔千五百番歌合〕・秋三・一三八二

かち人のとはぬ夜さむに待わひて 為家

木幡のさとはころもうつなり

〔万代和歌集〕 卷五・秋下・一一〇六

と、その影響が窺える歌が詠まれている。『源氏物語』には他にも「木幡の山のほども、雨もよにいと恐ろしげなれど……」（椎本）、「木幡山はいと恐ろしかなる山ぞかし……」（浮舟）という記述があり、その恐ろしさが強調されている。王朝文学の趣きは「木幡狐」にも通ずるものであり、「木幡」という土地自体に『源氏物語』と結び付くイメージがあるのではないかと考えたが、『源氏物語』に限らず、広く王朝文学の影響があるともとれる。

さらにもう一つ木幡を舞台とする物語として、お伽草子「鳥獸戯歌合物語」を挙げておきたい。これは、鳥、獸、虫が酒宴の席次を争い、動物たちはそれぞれ自分に関連のある古歌や説話を挙げ、上座に着こうとするという物語であり、木幡はこの物語の中で獸たちの座敷争いの舞台となっている。この作品は江戸中期の写本が一冊伝わるのみであり、流布のほどはわからないが、百二十三首もの和歌と様々な説話が引用されていることから、当時の物語制作の際に利用された動物像が確認できるだろう。さて、この座敷争いであるが、獸たちの中で最初に馬が以下のような主張を始める。

馬、す、(マ、)出て、申しけるは、異国の事は、いさしらす、
本朝に、我に上する獸、あるへからず、名譽を、かつく、申へし

先正月七日、白馬の節会とて、某を御賞玩あれは、何事か是に、
まさるへき、此事は、哥にも、連歌にも、聞ふるしたる、事な
れは、はしめて申に不及

人丸の詠哥に、山城の、こわたのさとに、馬はあれと、貫之の、
もち月の駒、高遠の、きり原の駒、とりくくなりし名哥也

木幡峠を舞台とした上で、第一にこの人麻呂歌が引用されていることからも、当時において「木幡」↓「馬」という連想が最も強かったと考えられ、「狐」を連想することは一般的ではなかったと思われる。そう考えると「木幡狐」は「木幡」を舞台として狐の物語を描こうという着想によるものではなく、「木幡に棲む狐」という既存の物語から直接影響を受けて成立したのではないだろうか。

先に挙げた狐女房譚の中で木幡を舞台とするのは、『伊勢物語難儀注』『曾我物語』所収の『玉津島明神歌徳説話』である。この説

話は『伊勢物語』の古注釈『伊勢物語難儀注』の一項、「玉津島の御使の事」と、軍記物語である『曾我物語』の「三原野の御狩の事」という章の挿話としておよそ同じ形で載る。まず、本説話の構成を確認してみたい。

- ① 業平の妻求め。木幡山のほとりで女と出会う
 - ② 業平と女、共に暮らす
 - ③ 女、歌を書き置いて立ち去る
 - ④ 女の使者、文を持って来る
 - ⑤ 男、使者の後を追う
 - ⑥ 男、木幡山の奥の塚で多くの狐を見る
 - ⑦ 狐、女に化け、夜明けまで男と過ごす
 - ⑧ 女、自らを玉津島明神の使者であると明かす
 - ⑨ 女、今後も忍んで来ることを伝え、消える
- この説話については既に「木幡狐」との関連が指摘されているが、⁽⁸⁾⁽⁹⁾確かに舞台を木幡とする点だけでなく、異類を神の使いとすること、「色好み」をする中将を相手とすることや、物語中に和歌を取り入れた王朝物語的な雰囲気も似通っている。ここで『難儀注』と『曾我物語』のどちらを参照したのかという疑問が出てくるが、『曾我物語』の中で『玉津島明神歌徳説話』を引用しているのは、「甲類」¹⁰「乙類」に分類されている仮名本系統の中でも、甲類本と乙類の円成寺本のみである。甲類本は乙類本より成立が遅いとされているため、『玉津島明神歌徳説話』が『曾我物語』中に取り入れられたのはそれなりに遅い時期であると思われる。とすると、やはり「木幡狐」は『難儀注』から材をとったと考えるのが妥当であろうか。『難儀注』についても詳しくみてみたい。

『伊勢物語難儀注』または『伊勢物語難儀抄』とは、『伊勢物語』の秘伝をまとめた『伊勢物語』古注釈の一つである。秘伝という通り、『伊勢物語』やその他古注釈にみられない独自の説が多く収められており、『玉津島明神歌徳説話』も『伊勢物語』二十一段を下敷きにしたものだが、その内容は大きく異なる。片桐洋一氏は『難儀注』について、「正道からかなりはずれるもの」「用いられる本文がかなり特異¹¹⁾」と評しており、「和歌知頭集」等のオーソドックスな古注釈と比較するとかなり独特なもののようなのである。

『難儀注』の成立年代は明らかでないが、以下のような現存する写本の状況から、室町前期には成立していたのではないかと考えられている。

- ・冷泉家時雨亭文庫本（室町中期から後期成立）※親本あり
- ・宮内庁書陵部本

（冷泉家時雨亭文庫本を江戸前期に模写したもの）

- ・天理図書館本（室町後期）
- ・鉄心齋文庫本（室町後期）
- ・東海大学本（江戸前期）
- ・山本登朗氏蔵本（江戸中期）

このように伝本は少ないものの、江戸中期まで書き写されていたことがわかる。また、『難儀注』独自の説を引用している作品がいくつかある。お伽草子の中では、異類物である「月林草」（近世初期頃）と、先述の「鳥獣戯歌合物語」（江戸中期以前）、また百科事典『塵荊抄』（一四八二年頃成立）などである。お伽草子への利用はやや近世にかかるものの、異類物の類に利用されていたことと、やや早く『塵荊抄』への利用がみられることを考え合わせると、室町末期

に作られた「木幡狐」へ影響の可能性も高いと言えるだろう。また、「木幡狐」には明らかに『伊勢物語』やその古注釈を利用している箇所はないが、中将という身分の男を相手とするという設定には典型的な業平像が重ねられているように感じられる。石川透氏は室町物語における業平像の利用について以下のように述べている。

公家物においては、既に主人公が理想化され、理想的人物と考えられていた業平像を包含してしまっている。公家物の主人公の多くが「中将」と称するのは、このような業平像の投影もあろう。¹²⁾

「木幡狐」には王朝物語的な雰囲気があることから、「三位の中将」に普遍化された業平像が投影されているのも理解できる。また、『伊勢物語』外の業平像について大津有一氏は、

注釈書は、（中略）多くの室町時代物語に登場していることから、物語を作るような知識人にとっては、直接文献に拠らなくても知っていた知識の一つだったと思われる。（中略）『伊勢物語』本文から離れた業平像をみてくると、そこには、当時存在していた秘伝や注釈書の知識が投影されていることがわかる¹³⁾と論じている。物語の作り手が秘伝や注釈書の知識に精通していたとすると、『玉津島明神歌徳説話』もそれなりに知られていた可能性があり、「木幡狐」の成立に影響していると考えてもよいだろう。

『玉津島明神歌徳説話』は、和歌の神である玉津島明神と業平を結びつける意図があると読めるが、「木幡狐」の場合は異類が救済の対象であるため神の霊威と人間を結びつける効果は機能しない。つまり、「神性をもつ狐との婚姻譚」という設定に関しては「木幡狐」において殆ど形骸化していると言える。『難儀注』の作者につ

いては明らかになっていないが、片桐洋一氏は「正統のものではなく(中略)末流・末輩のともがら¹⁴⁾」の手によって「公卿や歌道家の権威から少し離れた所¹⁵⁾」で生まれたものと推測している。「難儀注」が権威から離れた所で享受されていたとすると、この説話はその真偽よりも他注釈にはない秘事の面白味から、人々に興味を持って読まれたものと思われる。また、「伊勢物語」の古注釈という性格は、その説話にある種の神秘性を感じさせ得るだろう。「木幡狐」の成立背景に、仏教喧伝の目的があつたと仮定した上で先述の点を考えると、物語の面白味と神秘性が、享受者への受け入れられやすさと宗教的説得力という要件を満たすのではないだろうか。

さて、ここで現在伝わっている「木幡狐」諸伝本の内容の変遷を整理してみたい。「木幡狐」の伝本は現在七種が確認されている。以下にその詳細を記すが、うち、内閣文庫本は江戸中期成立の渋川版よりも時代が下るため、また、御影文庫本は未だ資料を披見できていないため、現時点では言及しないこととする。

①ローマ本(ローマ東洋美術館蔵)。小型絵巻一卷。天地に金切箔の装飾。剥落が激しく、料紙の変色も著しい。

詞書の欠落や錯簡と認められる箇所があり、修理・改装の可能性がある。

教訓的結語は存在しない。岡見本に比べると素朴な絵柄。

②岡見本。奈良絵本。横本二冊。挿絵十五図。保存状態は良好。

詞書や挿絵に他にない描写がある。室町から江戸への過渡期のものかとされる。

最後の挿絵の詞書で往生が暗示されている。ローマ本より整った絵柄。

③徳江本(徳江元正氏蔵)。奈良絵本。横本二冊。挿絵十図。剥落破損が少々ある。他に比べ記事が多く、弘法大師の化現である犬が登場する。

④黒川本(実践女子大学図書館蔵)。奈良絵本。横本二冊。挿絵十図。

「ローマ本」と「渋川版」の相違箇所どちらか一方に一致する場合が多い。

絵は古態に近い。一部文章の欠落あり。往生の場面まで描かれる。

⑤渋川版。江戸時代中期(享保年間)に刊行された『御伽草子』所収の一篇。

版本。横本二冊。挿絵十図。狐に装束を纏わせるといった点で絵の独自性が強い。

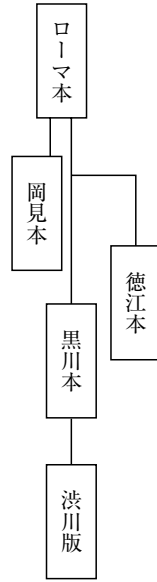
⑥内閣文庫蔵本(天保一一年書写)。『墨海山筆』中の一編。写本一冊。挿絵なし。

⑦御影文庫蔵本。

これらと比べると、黒川本の特徴からローマ本、黒川本ともに、渋川版と同系統の本文と考えられる。また、それぞれの伝本には成立過程での場面の取り違えがみられるため、比較的絵と本文の整合性のとれている岡見本が先行して成立し、その後絵にやや古い特徴のある黒川本、さらにその後継として渋川版が作られたと考えるのが妥当ではないだろうか。問題は欠落や錯簡の多いローマ本であり、絵巻という形態から古い成立のようにも思えるが、改装されたとなると横本を継いだ可能性もある。しかし、ローマ本だけ仏教的結びを欠くことが大きな欠落でないとするれば、仏教要素の薄いローマ本

がより古態に近いものと考えられ、独自の記述の多い徳江本については、ローマ本から黒川本へ至る過程で派生したものと位置付けられるだろう。その関係を図示すると次に示す〔図一〕のようになるだろうか。

〔図一〕



以上のように推測した成立順とそれぞれの特性から伝本の【Ⅰ類】【Ⅱ類】【Ⅲ類】という分類を試みた。また、伝本によって差異のある物語の結びを抜き出しておく。

【Ⅰ類】他の伝本より先行して成立したと推測されるもの。

(本文) 筋はⅢ類に近いがやや冗長。

(絵) ⅡⅢ類よりも多い。変化場面は半人半獣の姿。

①「ローマ本」。庵室での修行場面はあるが、その場面の挿絵は無い。

②「岡見本」。庵室での修行場面、訓戒的結語、きしゅ御前の往生が描かれる。

【Ⅱ類】他の伝本とは一線を画するもの。

(本文) 他の伝本にみられない挿話(一、藤の花を姫君に渡す。二、

姫君の安否を気遣う故里の両親。三、姫君と中将の別れ。四、

姫君と中将若君が再会する後日談)がある。和歌にも差異あり。

(絵) Ⅰ類より少ない。

①「徳江本」。庵室での修行場面、訓戒的結語、夢に現れた老僧のお告げ、嵯峨野の念仏が親子の行方を知らせるといふ伝え聞き、弘法大師の化現である犬が若君・中将をきしゅ御前と再会させるなど様々な独自の描写がある。

【Ⅲ類】他の伝本より遅い成立とみられるもの。

(本文) 筋はⅠ類に近いが、比較すると文意が通じにくい箇所もある。

(絵) Ⅰ類より少ない。洪川版は特殊な絵柄。内閣文庫本には挿絵がない。

①「黒川本」。庵室での修行場面、訓戒的結語、きしゅ御前の往生が描かれる。

②「洪川版」。庵室での修行場面、訓戒的結語が描かれる。

これらを見ると、「徳江本」の仏教的要素が圧倒的に多く、「岡見本」と「黒川本」が次いで多い。成立順を先程推測した通りと仮定すると、諸伝本のうち中頃に成立した伝本に仏教的要素が多く記されていることとなり、仏教的要素が特にその時代において積極的に取り込まれ、徐々に薄れたとも考えられる。第二章において「木幡狐」成立は「仏教の衰退期」にあったと述べたが、市古氏が中世物語を「一種の作為を含んだ読み物である」と論じていることから、やはり仏教の衰退期において作者側に仏教要素を取り入れる要因、読者を信仰へ導こうとする意図があったのではないだろうか。これに関して、『御伽草子集』の解説には「鼠の草子」などの形態は、本来は絵解の方式とかわりがあるようであり、交互に絵と詞書とを続けていきながら、一部で絵の中に絵詞を書き入れている¹⁷⁾との指摘があり、「木幡狐」にも見られるこの形態が絵解きと関連して

いるならば、その成立にも宗教的な作為が働いていたと考えられるだろう。次章ではこの絵解きについて考えてみたい。

五 「木幡狐」と「語り」——「絵解き」の利用——

絵解きとは一般的に、文字の読めない人々を相手に、宗教的な場で、物語絵・説話絵等を示し、その絵相を言葉で解説・説明するものと理解されている。その絵解きの内容は多岐にわたるが、宗教的色彩は共通しており、どれもが説教教化の一手段として用いられたらしい。この絵解きについての最も古い記述は重明親王の日記『李部王記』の九三一年の記事であるとされる。当時の絵解きは高僧自らが身分の高い者に対して解くものであったらしいが、中世になると解き手も聴き手も俗化し、寺社の内外で多くの人々を相手に解かれるものになったという。そのように外で解くために、携帯に便利な絵巻や掛幅絵が多用されるようになり、これは一種の芸能として民衆に歓迎され、庶民への仏教浸透に貢献したという。

ここで「交互に絵と詞書とを続け」という形態について考えてみたい。例えば、絵解きに使われる「道成寺絵巻」もそのような形態をとるが、この作品の画中詞について小峯和明氏は、「絵解きの痕跡を示すともいえよう」と、画中詞と絵解きの関連について肯定している。また、「道成寺絵巻」の画風は室町中期頃のものと考え、赤井達郎氏は「やがてお伽草子・奈良絵本へと展開する性格」をもつとしている。

それでは「木幡狐」も絵解きのために成立したものののだろうか。これを考える際に注目されるのが林雅彦氏の論であり、林氏は「絵解き」の定義について慎重な論を展開している。

絵相の解説・説明を伴わない絵解きはありません、反対に語り（中略）に絵画が用いられれば、それは絵解きの要素を持つ語りだとは言いがたいが、絵解きそのものではない。²¹⁾

このように、絵解きの本質を「絵相の解説・説明」とする前提から見ると、異類女房譚の系譜の中で成立した「木幡狐」はテキストありきの作品であり、それが絵解きのように語りを伴って読まれていたとするなら「絵解きの」と表現すべきであろう。「木幡狐」の読まれ方について現時点で確かなことは言えないが、市古貞次氏は、

中世小説の鑑賞・享受は、今日のわれわれのやうに目で読む、黙読するよりも、音読し、耳で聞くことよって行はれる場合が多かった。²²⁾

と、中世小説と語りの関係を論じている。ならば「木幡狐」にしばしば見られる典型的表現、「春は花の下にて日を暮し、秋は限なき月影に心をすまし」なども、語りに適したものと思われるが、断定するには些か材料が足りないだろう。

次に、視点を変えて伝本の形態に着目してみたい。前章で「木幡狐」諸伝本の比較を行ったが、ここでは他の伝本と異なり絵巻の形態をもつ「ローマ本」を最古のものと考察した。この伝本は縦一六センチという小型の体裁をとっているが、「室町時代中期ごろからお伽草子の絵巻のなかには、標準の半分ほどにあたる一五センチ前後のものがあられ」たようである。これらは当時「小絵」と呼ばれたらしく、例として「木幡狐」と同じ異類物の、「雁の草子」（一八・五センチ）や「藤袋草子」（一七・五センチ）が挙げられている。ローマ本の翻刻を行った佐伯英里子氏は「小絵」と呼ばれるお伽用の小型絵巻。その鑑賞の伝統を汲むような嗜好が、本絵巻の享受

層のうちにも想定されるのではないだろうか」と述べており、「木幡狐」はやはり物語を解くために携帯性の高い絵巻として作られたのが始まりなのではないかと思われるのである。また、そのローマ本以降、「木幡狐」は横本形態をとっているのであるが、これは、成立時に「解くもの」であった物語が次第に「読むもの」として広まり、個人で読む絵本として享受されるようになったためと考えられるだろう。

むすびに

本論文は「中世異類女房譚の一形成」と題し、異類女房譚「木幡狐」の形成背景を考察するものである。そもそも中世小説は、他の物語から改作されたものが多く、「木幡狐」も何らかの作品から発生したものと考えた。日本の狐説話は中国思想の影響もあり、妖狐譚と善狐譚が併存していたため、狐女房譚も日本の古い時代から存在していたが、次第に妖狐像が優勢となる。つまりその中でも書き継がれていった狐女房譚は互いに近い継承関係にあり、「木幡狐」は物語要素の共通等から、『伊勢物語難儀注』の《玉津島明神歌徳説話》に強い影響を受けたものと推測した。また、「木幡狐」は物語中の仏教色が強いという特徴があるため、『難儀注』の正道から外れた面白味と『伊勢物語』の秘伝としての神秘性が、物語の宗教的利用に一役買ったものと解釈できる。加えて、「木幡狐」の形態と「絵解き」の方法の結びつきから、「木幡狐」の構想として、民衆を読者として想定した、仏教凋落期における中世宗教家の思惑があったという結論に至った。

本論文では作者像として一宗教家を想像するのみであったが、

『難儀注』のようなやや正道から外れた注釈書を材としたとすると、およそ権威ある宗教家の作とは思えない。中世は知識人の層に大きな変化があらわれた時代であるとされていることから、中世になって新たに知識人として活躍し始めた者、その中でも宗教の世界に参入していった者が、「木幡狐」のような物語を作り出したのではないかと考えられる。

これまでの「木幡狐」に関する研究は、伝本の紹介や比較が多く、踏み込んだ研究はなされていないようであった。本論文では「木幡狐」の作品内部だけでなく、その周縁にも僅かながら踏み込むことができたのではないかと思う。考察としては未だ足りない部分も多くあるが、「木幡狐」を含め、お伽草子や異類女房譚研究の今後の進展を期待し、今回はここで閤筆としたい。

注(1) 市古貞次『中世小説の研究』（東京大学出版会・一九五五）

(2) 徳田和夫編『お伽草子事典』（東京堂出版・二〇〇二）

(3) (注(1))に同じ

(4) (注(1))に同じ

(5) 富永一登「狐説話の展開——六朝志怪から唐代小説へ——」（『学大国文』二九・一九八六）

(6) 大坪俊介「御伽草子『木幡狐』諸伝本における巻末部の問題——徳江元正氏蔵本を中心に——」（『国文学踏査』二二巻・二〇〇九・〇三）

(7) 山下裕子「『こわたきつね』にあらわれた信仰」（『実践国文学』三巻・一九七三・〇四）

(8) 市古貞次、大島建彦校注『日本古典文学大系第八八 曾我物語』（岩波書店・一九六六）頭注

(9) 石川透『室町物語と古注釈』（三弥井書店・二〇〇二）

- (10) 村上學『曾我物語の基礎的研究』（風間書房・一九八四）
 (11) 天理図書館善本叢書和書之部編『和歌物語古注統集』（天理大学出版部・一九八二）片桐洋一著、解題
 (12) (注9) に同じ
 (13) 大津有一『伊勢物語古注釈の研究』（八木書店・一九八六）
 (14) 片桐洋一『伊勢物語の研究（研究篇）』（明治書院・一九六八）
 (15) (注11) に同じ
 (16) (注1) に同じ
 (17) 大島建彦『日本古典文学全集三六 御伽草子集』（小学館・一九七四）解説
 (18) 『日本文学講座3』（大修館書店・一九八七）林雅彦「絵解きの世界その魅力と課題」
 (19) 『絵解き』（有精堂出版・一九八五）小峯和明「中世説話文学と絵解き」
 (20) 赤井達郎『絵解きの系譜』（教育社・一九八九）「絵巻物の絵解き」
 (21) (注18) に同じ
 (22) (注1) に同じ
 (23) 赤井達郎『絵解きの系譜』（教育社・一九八九）「浦島子の絵巻と掛幅」
 (24) 佐伯英里子「新出の『木幡狐』について」（『美術史学』一三巻・一九九二）

受贈雑誌(八)

梅花日文論叢	梅花女子大学大学院日本文学会
花園大学日本文学論究	花園大学日本文学会
阪大近代文学研究	大阪大学近代文学研究会
比較文学年誌	早稲田大学比較文学研究室
弘前大学国語国文学	弘前大学国語国文学会
広島女学院大学国語国文学誌	広島女学院大学日本文学会
広島女学院大学日本文学	広島女学院大学日本語日本文学科
藤女子大学国文学雑誌	藤女子大学国語国文学会
文学研究	聖徳大学短期大学部国語国文学会
文学史研究	会
文学論藻	大阪市立大学国語国文学研究室
文教国文学	文学史研究会
文教大学国文	東洋大学文学部日本文学文化学
文藝研究	科研究室
文藝と批評	広島文教女子大学国文学会
文藝論叢	文教大学国語研究室
	東北大学文学部国文学研究室内
	日本文芸研究会
	文藝と批評の会
	大谷大学文藝学会